

フランスにおけるエジプト学教育

——リール第三大学を事例として

坂本 翼

リール第三大学 客員研究員

I. はじめに

エジプト学が好きだ。いつからそうだったのかはもうあまり覚えていないが、高校二年次にはすでにこの道を志していたと思う。ならば早稲田大学へ、当然のようにエジプト学研究所の門を叩いたのが大学一年、齢十八の頃である。それから10年余りが過ぎた。気付けば日本という枠組みを大きくはみ出し、まずはスーダン、続いてフランスで研鑽を続けてきた。諸学兄から伝え聞くところによれば、この国でエジプト学学位（博士号）を取得した日本人は筆者が初めてらしい。イギリスやドイツ、アメリカではなく何故フランスを選んだのか。他国と比べて教育上の特徴はどこにあるのか。見解としては個人的範疇に留まるものの、以下、留学体験を交えつつそのようなことを報告したい。日本の修士・博士課程学生が留学を一考する機会となれば幸いである。

ここであらかじめ断っておくと、筆者が研究対象としているのはスーダンである。したがって厳密に述べればエジプト学とは呼べないものの、両国の古代史は密接に関わりあっているためその研究・教育も似たような伝統に置かれている。実際、筆者も留学中はエジプト学の薫陶を受けてきた。上記を踏まえそれでは、これまでたどってきた個人的軌跡に引きつけながら論を進めてゆこう。

II. エジプト学とエジプト考古学

振り返ってみると、筆者の研究姿勢は留学前後で大きく変化した。その最たる要因は、「エジプト学」と「エジプト考古学」の理解にあるように思う。日本はその差を分析対象へ求める傾向にあるがフランスはそのような認識にない。これは当該学問を考える上で極めて重要なため、ここから議論へ入ってゆくことにしよう。

日本で「エジプト学」と「エジプト考古学」が議論されるとき、そこには明確な住み分けが志向されてい

る。前者は文字資料（ヒエログリフ、ヒエラティック、デモティックなど）から歴史を研究する学問、後者は物質資料（土器、石器、埋葬など）から同様の試みを行う学問、といった具合である。誤解を恐れず述べるならば、碑文学者としての教育機会に恵まれない日本でエジプト学は敬遠されがちであり、エジプト考古学とは似て非なる学問分野と考えられている。これはある意味当然と言えるかもしれない。なぜなら、文字資料と物質資料の双方へ等しく精通するためには気が遠くなるような学習時間が必要だからである。英・仏・独語読解が不可欠な現実と相まって、日本人研究者にとってこれは軽視できない問題となっている。

ただし、こうした学習上の困難は日本人に限ったものではない。実際、留学中は、博士課程であっても、多くのフランス人が外国語読解に苦しんでいる場面をしばしば目にしてきた。満足な読解能力を得ないまま博士課程を終えた学生もいる。これはあくまで極端な例だが、いずれにせよ研究者として見込みがないと判断されると容赦なく（指導教授もしくは大学側から）追い出されるため、在籍中は学位論文執筆に全精力を注がなければならない。相当量のプレッシャーのなか研鑽に励むことで、そこからやがて新世代を担う優秀な研究者が輩出されてゆくのである。

以上のような教育制度を持つフランスにおいて、「エジプト考古学」はあくまで「エジプト学」の下位分野である。後者が学問的優位にあるという事実は、筆者の所属研究所（Institut de papyrologie et d'égyptologie de Lille）の名称にエジプト学（égyptologie）が採用されている点にも見て取ることができる。権威的学術雑誌（*Revue d'égyptologie*）も同様であり、総じてフランスではエジプト考古学（archéologie égyptienne）が用いられることは余りない。これはいったい何故なのか。

端的に述べれば、その根幹には文字資料の圧倒的重要性が横たわっている。確かに、文字資料が認められない地域・時代における物質資料の優位を疑う余地はない。しかし、古代エジプトに限って述べれば早くも紀元前三千年紀にヒエログリフが出現し、やがてヒエ

ラティックやデモティク、プトレマイオス朝時代を過ぎればギリシア語やコプト語、ラテン語がこれに加わり得る。その内容も驚くほど多様である。ツタンカーメン王を例に挙げればわかるように、特定個人の血縁関係や行政組織、果ては宗教思想に至るあらゆる側面が詳らかにされており、その歴史的射程の深さはいくら強調しても強調し過ぎることはないであろう。

文字資料の重要性を物語る一つの逸話を挙げよう。エジプトの首都カイロに、仏極東考古学研究所 (Institut français d'archéologie orientale) が門を構えている。すでに130年以上の伝統をもつ研究機関であり、したがってその所長はフランスを代表するエジプト学者として見なされる傾向にある。特筆すべきは、2010年の組織改編に伴い先王朝時代専門家が就任した際、少なからぬ研究者がこの決定を不服としたことである。曰く「物質資料しか扱えない考古学者がトップに立つべきではない」と。極めて短い発言だが、ここにはエジプト学という学問へ求められる本質的条件（すなわち文字資料と物質資料の総合的解釈）が浮き彫りになっている。

以上をまとめるならば、フランスのエジプト学とはいわば文字資料と物質資料双方に寄って立つ総合学問であり、その先に浮かび上がる歴史像の厳密な再構成へコミットしてゆこうとする立場に他ならない。私見に過ぎないことを断った上で述べれば、両者を水と油のように切り離す日本の認識は、この意味で研究領域の不本意な縮減に結びついているように思う。つまるところ、物質資料から特定パターンを抽出するのが考古学研究の肝であるならば、そのパターンを歴史像へ落とし込む段階において文字資料の圧倒的深度に対峙せざるをえない。すなわち両者の統合は不可欠である。「エジプト学」と「エジプト考古学」の関係性そしてその研究法をより良いものにしてゆくためにも、まずは、豊富な留学経験を持つ日本人研究者がしっかりと連携体制を整えてゆくことを肝に銘じなければならぬ。

III. フランスにおける学位論文執筆

1. どの大学を選び、どのように出願するか

簡潔ながらここまで、エジプト学とエジプト考古学の概念的整理を行ってきた。ここからは、筆者の経験を手がかりとしつつ、フランスで学位論文を執筆するとはどのようなことなのか、そしてそのためにいかなる準備が必要なのかを眺めてゆくことにしよう。な

お、エジプト学の学位を取得できる国公立研究機関は7つあり、いずれも独自の名称を擁している：

- ①高等研究実習院 (Centre Wladimir Golenischeff)
- ②ストラスブール大学 (Institut d'égyptologie et de papyrologie)
- ③パリ第四大学 (Centre de recherches égyptologiques de la Sorbonne / Institut de papyrologie de la Sorbonne)
- ④モンペリエ第三大学 (Institut d'égyptologie François Daumas)
- ⑤リヨン第二大学 (Institut d'égyptologie Victor-Loret)
- ⑥リール第三大学 (Institut de papyrologie et d'égyptologie de Lille)
- ⑦ルーブル学院 (École de Louvre)

おそらく最初に説明すべきは、なぜリールを選んだのかという点だろう。実際、研究環境に絞れば断然パリを選ぶべきである。パリ第四大学はさることながら、隣接するコレージュ・ド・フランスのエジプト学図書館にはありとあらゆる専門書が所蔵されており資料収集に困ることはまずないだろう。一方リールは、同じく相当量の所蔵を誇るとはいえやはりパリに比べると見劣りする。大学設備も最新とは言いがたく、日々多くの不都合を感じるのが現実である。

それでもリールを選択した理由は3つ。第一に、渡仏を考え始めた2011年当時、筆者の専門分野の教授資格を持つエジプト学者がここにしか在籍していなかったからである。したがってそもそも他の選択肢が無かったというのが正しい。第二に、フランスに先立ち留学していたスーダンで、リール第三大学の研究者と知り合う機会があったからである。幸運にも発掘調査まで参加させていただける事になり、正直それまで渡独を予定していたものの、これをきっかけとして切り替えたという経緯がある。第三に経済的側面である。後述するように、筆者はまず日本学術振興会特別研究員として海を渡ったが、奨学金が途絶えたあとは身銭を切って滞在するつもりでいたため生活費を抑える必要があった。この点、リールを選んで正解だったと言える。寄宿していた学生寮（シャワー、トイレ付個室）の家賃は月240ユーロだが、アロカシオン (allocation) と呼ばれる政府補助金を通じて毎月90ユーロが充当され、結果的に150ユーロまで抑えることができた。日本円換算にしても2万円以下である。パリならばどんなに安くても月500ユーロは下らないた

め、学位論文を書き上げる前に資金が底を尽きていたかと思うと今更ながら肝が冷える。

留学生活において奨学金は極めて重要である。筆者の場合、渡仏1年目は日本学術振興会特別研究員として援助を受けていたものの、2年目は一切収入源が無かった。運良く3年目で公益財団法人高梨学術奨励基金研究助成と仏政府給費留学生に採用されたため、生活費と研究費を一部賄うことができたと言える。なおフランスにも博士協定 (contrat doctoral) という特別研究員制度があり、これに採用されると3年間、月1600ユーロの奨学金が支給される。大学講義を受け持つなどして教育に携わると支給額が跳ね上がるようである (月2000ユーロ)。渡仏にあたり筆者も出願を検討したが、出願時点でフランスに居住している必要があったため泣く泣く見送った。日本と比べれば学費自体は微々たるものだが (年300-400ユーロ)、それを差し引いても金銭面では相当苦労した。

学位論文の話題へ移る前に、もう一つ重要な点に触れておこう。それは語学力である。通常、こちらの高等教育機関へ正規入学するためには仏語資格試験 (DELF) のB2レベルを満たしていることが前提だが、筆者の語学力はこれに到底及ばなかった。したがって渡仏後直ちに語学教育を受けることになるのだが (週16時間)、ここには重要な示唆が含まれている。すなわち、講義を通じて専門知識を蓄えてゆく学部や修士と異なり、博士課程は学位論文提出がすべてであるため研究以外のことは余り重要視されていないように思う。極端な話、文章読解と執筆能力にとりたてて大きな問題が認められなければ、たとえコミュニケーションスキルが十分でなくても入学を許されることがある。単に運が良かっただけかもしれないが、このような可能性を信じて積極的に出願することが必要となる。

出願書類は次の通り。筆者が提出したものをざっと挙げれば、履歴書、戸籍抄本、志望理由書、学位論文計画書、これまでの学位証明・成績表である。いずれも仏語による執筆もしくは法廷翻訳が原則だが、さらに指導教授の受入承諾書が必要となる。したがって師事したい研究者からあらかじめ合意を得ておかななくてはならない。入学許可後も査証や現地宿舎の手配に奔走することとなるが、2012年1月に晴れて渡仏することができた。

2. 学位論文執筆まで

ルール第三大学では、博士課程であっても180単位

の履修が義務付けられていた。このうち120単位は学位論文によって賄われるため、実質的に課せられていたのは60単位である。内訳は次のとおり：

- ・学内セミナーへの出席 (計60時間)
- ・英語学習 (B2レベル相当)
- ・仏語学習 (B2レベル相当)
- ・顕著な課外活動 (学会やワークショップの主催、半年以上の海外調査経験など)
- ・査読論文1本と学会発表2回

以上が学位論文執筆までのノルマであったが、これはルール第三大学に特有のものらしく余り参考にならないかもしれない。パリ第四大学の知り合いは一切履修義務を課されていなかった。どちらが良いかは一概に判断できないものの、いずれにせよ、こうしたノルマを早い段階で片付けておくことが学位取得の鍵となる。

学位論文執筆は指導教授との共同作業に近い。自ら文献を読みこなし、先行研究の問題点を抽出・分析し、そして一章分を書きおろす。これを指導教授に見せてはコメントをもらい、推敲を重ねながらより完璧なものへ近づけてゆく。最も苦労したのはやはり仏語である。固有の文章作法 (下記参照) や各単語のニュアンスなどを一から学ぶ必要があったため、留学当初は四苦八苦の連続だった。今でこそそれなりのものが執筆できるようになったが、こればかりは苦しみながら体得するしかないと思う。

さて、筆者が師事したのはヴァンサン・ロンド (Vincent Rondot) である。モンペリエ第三大学で学位取得後、仏極東考古学研究所を経てパリ国立科学研究センターの常勤研究員へ採用され、当時ルール第三大学に籍を置いていた。現在はルーブル美術館古代エジプト美術部門長を務める。元々の専門は新王国時代の宗教であるが、その後興味を拡大しローマ帝政期にも踏み込んでいる (主著として *La grande salle hypostyle de Karnak : les architraves*, Paris, 1997 と *Derniers visages des dieux d'Égypte : iconographies, panthéons et cultes dans le Fayoum hellénisé des II^e-III^e siècles de notre ère*, Paris, 2013)。彼がどれほどスーダンへ精通しているかは、仏考古学研究所 (Section française de la direction des antiquités du Soudan) のダイレクターを4年間務めていたこと、関連国際学会の現会長であることを挙げればとりいそぎ十分だろう。

指導教授からは多くを学んだが、中でも印象に残っ

ているのは「博士課程在籍中は学位論文に集中し、細かな業績稼ぎに躍起になるのはやめなさい」という発言である。振り返ってみるとこれには二つの意図があったように思う。第一に、フランスの博士課程は原則6年までであり、それを超えての学位取得はまず認められていない。この点、エジプト学専攻生は一年の数ヶ月を海外調査に費やすことが多いため、標準就業年限内で学位論文が書けず退学させられるケースも少なからず見受けられた。このような事態を未然に防ぐという意図がまず一つ（筆者は外国人であるためなおさらだったと思う）。第二に、フランスで重視されるのは博士課程在籍中の論文数ではなく、どれだけ質の高い学位論文を書き上げたかである。換言するならば、求められているのはあくまで既往研究を刷新しうる突破力であり、その養成こそがフランスのエジプト学教育を特徴付けている。

ではいかに突破力を磨くか。これが個人的才能に左右されることは否めないが、研究に思う存分没頭できる環境がやはり大きいと思う。日本では数多くの雑用をこなしながら学位論文を執筆するのが通例となりつつあるが、フランスの場合、指導教授を例外として周囲の干渉を受けることがほとんどない。悪く言えば放任主義とも取れるが、裏を返せばこれは、学位論文執筆には数年単位の徹底的習熟が不可欠であることを物語っている。指導教授はよく次のようなことを口にしてきた。「毎日、就寝前の数分でいいからヒエログリフを読むようにしなさい。一年経てば読解能力は大きく向上しているでしょう」。文字資料一つとってもこれほどの努力が必要なのである。学部時代から関連授業を履修しているフランス人でさえこうなのだから、日本人がエジプト学を修めることがいかに高いハードルであるかを理解できよう。

また、留学当初筆者を悩ませたものの一つに、仏語独特の文章作法がある。おそらくお国柄に通じるのだと想像するが、日本では耳にしたことのないような規則が目白押しである。例えば、仏語において世紀 (siècle) とは特別なものであり、関連数字は小型大文字で記すことが通例となっている。また英語で言うところの引用符“ ”は«»に取って変わるし、コロン (:) やセミコロン (;) はその前後に一文字分の空白をとることが良しとされる。さらに仏語は極端なまでに単語の繰り返しを嫌うので、パラフレーズ (言い換え) が非常に重要となる。具体例を挙げればきりがながい、このような文章作法をまずしっかり頭に叩き込むことが、結果的には学位取得を早めるのだと今になっ

て実感する。日本で独習しようと思えばできる内容であり、この点、渡仏前の準備不足が露呈してしまっている。

筆者の学位論文は、「王国の余白：ポストメロエ移行期をめぐる考古学的研究 (*Aux marges du royaume : étude archéologique sur la période de transition postméroïtique*)」というものである。序章と終章を合わせると全9章構成となっている。すなわちこれが渡仏後4年間の作業量に相当するわけだが、留学一年目は1章書き終えたかどうかというところだった。行政手続と語学学習に時間を取られたことが大きな原因である。ただし、これから留学する日本人へ声をかけるとするならば、こうした困難は必ず解消されてゆく。筆者の場合、毎年10月から12月にかけて発掘調査に参加し、多いときで10人を超えるフランス人と共同生活を送るうちに語学力が改善されていった。ライティングも同様である。文字通りマンツーマンで毎日数時間の添削を受けたことが学位論文執筆の下地となっていった。

なおここで説明しておく、筆者が参加した発掘調査は毎朝6時から12時までを基本としており、昼食後は基本的に自由時間であった。したがって昼寝をしても良いし自らの研究に勤しんでも良い。当然ながらやがて凶面整理や遺物実測に追われることとなるが、調査前半はこのように緩やかな生活リズムが続いてゆく。とりわけ重視されているのはストレスフリーな雰囲気作りであり、外国人の筆者も伸び伸びと過ごすことができた。

こうした柔軟性は隊員構成にも当てはまる。フランス人が大半を占めることは論を俟たないが、スイス人やドイツ人などにも平等に門戸が開かれていた。具体的には、プロジェクト・リーダーである指導教授を筆頭に、保存修復専門家が三人、フリーランスの考古学者が一人、土器専門家が一人、そしてパリ国立科学研究センターと仏極東考古学研究所からそれぞれ研究補佐と写真家が一人。筆者を含めた博士課程学生がこれに加わる。発掘調査後の整理作業も各人の裁量に委ねられていた。ドロップボックス (Dropbox) などのオンラインストレージサービスを活用しながらデータをやり取りし、また年に数回会合を開くことで連携を維持しつつ報告書の出版準備が進められてゆく。簡単に聞こえるかもしれないが、これも100年以上に及びフランスが培ってきた伝統の一部であり、日本が参考にすべき点は多々あるように思う。

以上のような機会を除けば、筆者は、学位論文のテーマについて口を酸っぱく言われたことはなかった。

すでに目指すべき方向性が明確にあったからである。しかしどうやらこれは教育制度とも関連しているらしい。例えばドイツでは、しばしば公募研究という形で学位論文のテーマを授けることがあるが、フランスはこのような制度を採用していないばかりか目指すべき方向性が定まっていない学生は博士課程入学時点で厳しく振るいかけられる。修士課程二年目で優秀な成績、すなわち20点満点中16点以上を取めないと進学は認められなかったと記憶している。換言するならば、このような難関をくぐり抜けてきた学生はすべからず研究能力を備えていると言え、よほどの問題がない限り、学位論文のテーマは各自の裁量に委ねられているのが現状である。

当然、学位論文はかなりの質を要求される。この点指導教授はとくに厳しく、博士課程の学生であっても一研究者としての作法と心構えを持つように要求していた。留学中、筆者が最も影響を受けたのはこうした精神的側面だったかもしれない。「常に最高の作品を目指す」、そのような信念こそが研究者を一流たらしめてゆくのであり、指導教授が世界的評価を受ける所以なのだろう。

したがって、博士課程在籍中はそれこそ生活の全てを学位論文執筆に捧げた。筆者の力量不足は否めないものの、こうした生活を送っていても4年間かかったのだから、旅行やオペラなどの娯楽に精を出していたら終わらなかつたと断言できる。起床しては大学図書館で文献を複写し、お昼を学食で済ませた後は、23時まで営業している近所のカフェで粘って毎夜勉強した。辞書片手に格闘するうち2週間から3週間が過ぎていたこともあった。書き終えたはずの文章が気に食わず、何週間もその校正に時間を取られたこともあった。同僚と気晴らしに出かけることももちろんあったけれど、基本的にはモノトーンな生活を送っていたと言えよう。留学すれば自動的に研究が進むわけではない。留学するからこそ、日本にいた時の数倍頑張らなければならないというのは正鵠を射ていると思う。

最後にいくつか追記しておく。博士課程在籍中は国際学会で3回発表した。それぞれ2010年のロンドン、2013年のリール、2014年のヌーシャテルである。また当然ながら、学位論文執筆にあたり世界中から文献を取り寄せた。研究を独自のものとするためには、他人が見向きもしないような未出版資料にも当たらなければならないだろう。フランスには Atelier National de Reproduction des Thèses という学位論文販売機関が存在するが、こうしたものを知っているか否かも後々

大きな分かれ目となってくる。もし機会があればいつか日本語でまとめて紹介してみたい。

3. 学位論文執筆後

筆者が学位論文を書き上げたのは2015年10月頃だった。渡仏したのが2012年1月だから、理論上は3年9ヶ月を費やしたことになる。専門業者に2回、知り合いのネイティブ研究者に1回文章を校正してもらい、ようやく完成というところまでこぎつけた。校正料だけでも10万円ほどかかったと記憶している。研究助成と仏政府給費金でその一部を賄うことができたが、こればかりは運に左右されざるを得ないだろう。校正後に指導教授と数度面談を行い、論旨や体裁的確さ、本文と文献表の整合性などが厳しくチェックされたのちめでたく完成となった。

ここまでの学位論文執筆の経緯であるが、その後の流れも簡単に説明しておこう。残されているのは、印刷・製本、そしてスートゥナンス (soutenance) と呼ばれる審査会である。前者はとりたてて難しくない。専門業者に PDF データを提出し、製本された学位論文を一週間後に受け取るだけであった。一方、後者は多少手間取る。なぜなら学位論文審査員を選定しなければならないからである。リール第三大学の場合、最低4人から最大6人、さらに海外から当該分野の世界的権威を一人もしくは二人招聘することが義務付けられていた。以下に筆者の学位論文審査員を示す：

- Charles Bonnet (フランス学士院会員／ジュネーブ大学名誉教授)
- Claude Rilly (パリ国立科学研究センター研究員)
- David Edwards (レスター大学考古学部講師)
- Didier Devauchelle (リール第三大学エジプト学研究所教授)
- Frédéric Colin (ストラスブール大学エジプト学研究所教授)
- Vincent Rondot (ルーブル美術館古代エジプト美術部門長)

審査会自体は極めて長い。まず30分ほどかけて学位論文概要を説明したのち、各審査員と質疑応答を繰り返すことになる。間違いや至らない点があるのは仕方ないにしても、大切なのは批判に対し自説を擁護 (soutenir) すること、すなわち求められているのはあくまで確固たる主張力である。数時間に及ぶ議論の末、当該分野の第一人者として認められればめでたく



学位論文審査会

学位を授かることができる。4年間に及ぶ留学生活を身を結んだ瞬間であった。

余談となるが、エジプト学を専攻する日本人に留学を進めるかと問われれば「はい」と答えるだろう。確かに孤独である。生活の全てを自らの手で、しかも不慣れな外国語で築き上げてゆかなければならないし、日本との関係性も少なからず希薄となろう。また覚悟も必要である。「もう二度と帰国できなくなってもいい」、それくらいの決意を胸に抱いて渡仏した気がする。これはいささか極端と言わざるを得ないが（スーダン考古学は日本に根付いていないため如何に学問を修めるべきか相当思い悩んだ）、それでも研究したいことがある、自分の立ち位置を知ってみたい、そういう欲求から留学を決意した。数多い挫折は自らの過信の反省へ、少なからぬ手応えは研究者としての情熱へ。成功失敗関係なく、その積み重ねこそが血肉となってゆくのだ。

4. フランス留学の勧め

フランスでエジプト学を修めようとする学生は少ないかもしれない。それでもこの国を目指す後学のため、最後にささやかな手引きをしたためたい。ただし、あくまで筆者の個人的見解に過ぎないことを断っておく。

まず留学時期だが、これには2つの可能性がある。研究テーマがまだ定まっていなければ修士課程から渡仏しても良いだろう。言い換えれば、前述のように博士課程の標準就業年限内で学位論文を提出できなければ退学の憂き目をみるため、そのような状態で進学すると痛い目をみる。ただし、矛盾するようであるが、修士課程で留学するメリットはそこまでないと思う。ヒエログリフやデモティクを早い段階で習得

できる点は大きな魅力だが、これを除けば、研究初期を慣れない異国で始めるのは相当のハンデであるように思う。それならばむしろ、博士課程での留学を見越して資料収集に勤しんだり、もしくは仏語独特の文章作法をしっかりと勉強したりする方が後々役に立つかもしれない。要するに、焦ることなく、日本語で学べることはしっかりと身につけておく方が良い。外国語で学ぶより何倍も効率的であることは言うまでもない。

学位論文の方向性があらかじめ定まっている場合、博士課程への留学を勧める。師事すべき研究者もおそらく把握できているだろうから、直接連絡を取り手続きを進めるのが良からう。ここで改めて強調しておく、フランスにおけるエジプト学の中心は紛れもなくパリである。コレージュ・ド・フランスを始めとする図書館や大学設備の充実度はやはり地方のそれと比べ物にならない。したがって理想的にはパリへの留学を勧めたいが、経済的側面を考えるとあまり現実的とは言えないかもしれない。この点、筆者が滞在するリールからパリまでは高速鉄道（TGV）で一時間、片道約20ユーロである（バスならば3時間、約10ユーロ）。必要とあらば気軽にアクセスできる距離であるため、このように地方を拠点としつつパリへ赴くのも一つの可能性として挙げられよう。

もちろん、パリから文献を取り寄せる方法もある。PEB（Prêt-Entre-Bibliothèques）と呼ばれる図書館間相互貸借システムである。所属大学図書館に申し出るのが通例だが、リール第三大学では、国内／国外書籍の取り寄せは無料／一律9ユーロ、論文複写は10ページ3ユーロであった。事情は各大学まちまちに違いないが、いずれにせよパリ以外を拠点としてもそこまで支障はないことを知っておくと良い。

留学するならば仏政府給費留学生への出願も考えたい。給費自体は一年間のみだが（月767ユーロ）、その後も数年間、学費や健康保険料免除、研究雑費や論文校正費の援助を受けることができる。個人的には二次試験を思い出す。一次試験の書類選考を通過すると、通常、東京で個人面接を受けることになるが、その日程として指定された12月中旬、筆者はスーダンで発掘中、しかも電気もないような田舎にいた。したがってスカイプ面接の運びとなったのだが、それはもう生きた心地がしなかった。スーダンで十分な通信速度が確保できるのか、そもそもどこでインターネットに繋がれば良いのか。数週間陰鬱な気分を味わったのち、最終的に首都ハルツームの最高級ホテルへ一泊し、その一室で面接に臨むこととなった。いかなる状

況でも諦めなければ何とかなるものである。使い古された言葉かもしれないが、「志あらば道は開かれん」といったところだろうか。

論文を執筆したら投稿が待っている。英語であれば Editage や Scribendi などの校正業者が有名だが、仏語についてはまだ手探りといった感がある。これまでいくつもの校正業者をお願いしてきたが、中でも筆者が重宝しているのは I Webb Language Services である。決して安くはないが、日本よりリーズナブルかつ数回にわたり丁寧な校正を行ってくれる。興味ある向きは問

い合わせてみると良い。また学術雑誌に関して述べれば、フランスでもっとも権威的とされるのは *Revue d'égyptologie* と *Bulletin de l'Institut français d'archéologie orientale* である。ゆくゆくはこれらへの論文投稿を目指したい。かくいう筆者も欧米雑誌へ数本投稿中であり、まさにいま研究者としての岐路に立っている。

取り留めのない内容ばかりで恐縮だが、以上をもって、フランスにおけるエジプト学教育の報告としたい。願わくばこの国で、近いうちに二人目の日本人学位取得者が現れることを期待しつつ。